

Title	フランス革命二百年祭記念を期して発刊された内外の諸著書について
Sub Title	An introduction to the books published in Japan and foreign countries in the two hundred year's memorial of French Revolution
Author	平山, 栄一 (Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.1 (1990. 3) ,p.135- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学会動向
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900300-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス革命二百年祭記念を期して発刊され た内外の諸著書について

平 山 栄 一

一九八九年はフランス革命が起こってから二百年目になるので、フランスではこれを記念する諸種の学会や一般の記念祭が企画中であるが、そのおもな日程表は、一九八九年一月一日の毎日新聞に記載されている。わが国でも諸集会の予定があることが、一九八八年七月発行の雑誌『思想第七六九号』（岩波書店）で、遅塚忠躬東大教授が紹介されている。なおその『思想』には、昨年来日され諸所で講演されたミシェル・ヴォヴェル（ソルボンヌ教授）が最近力説されつつある、心性（mentalité）を革命の原因と動向に関連づける新説の講演の翻訳（広島大助教授立川孝一氏による）や、松浦義弘日大講師の書かれたアナール派の観点からみた革命史の新見解も掲載されていて、ともに注目すべきものがある。

ここに筆者の手にした近年発行の内外の革命史についての諸書の簡単な紹介を試みたいが、もちろん重要な書を逸したり、また時代的にも、一七八九年から一七九九年の革命時代の前後に多少わたることもお許しを得たい。以下紹介の便宜のため、はじめに番号で書名を列挙し、つぎに内容についての私見を述べることにするが大量の諸書の全容にわたって検討することは、短時間では不可能なので、表面的なものにとどまることは御寛容をいただきたい。フランス革命史そのものについても、現在は再検討の問題となっており、単純なブルジョア革命ではなかったとか、封建制は大革命前にすでに消滅していたものであるとか、革命そのものの否定論など、種々の議論がなされており、フランス革命二百年記念集

のあとでまた新たな問題提起がおこなわれることと思われるが、これらについては別の機会にゆずりたく、ここでは筆者のみた重要と思われる諸著作の簡単な紹介にとどめたい。

A 外国発行書

- 1) J. Tulard, J. F. Fayard, A. Fiero (Paris, Robert Laffont, 1987)
 ((Histoire et dictionnaire de la Révolution française))
- 2) Jean Favier etc. (Paris, Larousse, 1988)
 ((Chronique de la Révolution, 1788-1799))
- 3) Jacques Godechot (Paris, Librairie Académique Perrin, 1988)
 ((La Révolution française, chronologie commentée, 1787-1799))
- 4) Jacques Godechot (Paris, Press Universitaire de France, 1986)
 ((Les Révolutions, 1770-1799, 4^e édition))
- 5) Jacques Godechot (Paris, Edition Aubier Montaigne, 1983)
 ((La Grande Nation, L'expansion révolutionnaire de la France dans le monde de 1789 à 1799, 2^e édition, entièrement refondue))
- 6) Samuel F. Scott and Barry Rothhouse (Greenwood Press, Westport Connecticut, 1985)
 ((Historical Dictionary of the French Revolution, 1789-1799, Vol. I, A-K, Vol. II, L-Z))
- 7) Owen Connely etc. 1985)
 ((Historical Dictionary of Napoleonic France, 1799-1815))
- 8) Jean Tulard : (Paris, Arthème Fayard, 1987)
 ((Dictionnaire Napoléon))
- 9) Jacques Solé (Édition du Seuil, 1988)
 ((La Révolution en questions))
- 10) Michel Péronnet (Toulouse, Privat, 1989)
 ((50 mots clefs de la Révolution française, préface de Jacques Godechot))
- 11) D. M. G. Sutherland (Oxford University Press, 1986)
 ((France 1789-1815, Revolution and Counter revolution))
- 12) Michel Vovelle (Paris, Édition la Découverte,

- 1985)
 ((Idéologies et Mentalités))
- 13) Michel Vovelle, sous la direction de (Paris, Édition la Découverte, 1988)
 ((L'Etat de la France pendant la Révolution (1789-1799)))
- 14) Jean-François Fayard (Paris, Robert Laffont, 1988)
 ((La Justice révolutionnaire, chronique de la Terreur))
- 15) Lynn A. Hunt (University of California-Berkeley Press, 1984)
 ((Politics, Culture and Class in the French Revolution))
- 16) Guy Arbellot, Bernard Lepetit, Jacques Bertrand (Paris, Édition de l'École des Hautes Études en Sciences Sociales, 1987)
 ((Atlas de la Révolution française 1. Route et communication))
- “II. L'enseignement 1760-1875 (par Dominique Julia etc.)”
- 17) Jacques Godechot (Paris, Fayard, 1987)
 ((Le comte d'Antraignes, un espion dans l'Europe des émigrés))
- 18) Jean-Paul Bertaud, (Paris, Édition Complexe, 1987)
 ((Bonaparte prend le pouvoir, la république meurt-elle assassiné?))
- 19) 1) これはジャン・テュラール教授ほか二名を加えた共編となっているが、一冊でフランス革命の全貌を知ることができるよう編集されており約一、二〇〇頁あるが、序文でテュラール教授(ナポレオン研究所長)は、フランス革命といってもフランスだけの革命か、あるいは大西洋革命という考え方もあり、革命陰謀説、革命賛美説その他さまざまな考え方があることを述べ、史料にもとづく適確な説明を述べる方針で約三百頁にわたって、かなり詳細な革命史の叙述を試みたのち、第二部はフイエロ氏による一七八九年一月から一七九九年十二月までの、日々の事件の年表にうつるが、これは Jean Massin の Almanach de la Révolution française に依拠した詳細なものであり、この書は一九六三年初版、

一九八八年続篇ナポレオン時代とともに再刊された。つぎの第三部は、革命時代の世界と題し、テュラール氏によって革命が諸国に及ぼした影響を簡潔に述べたのち、第四部の事典は三者の協力により、全体の半ば以上、七百頁ばかり、事典形式で革命の事件、人物の小伝などすべての事項に触れ、各時代の憲法の全文までとり入れている。最後に革命史全体の可成り詳細なビブリオグラフィが付けられている。便利で利用価値の高い書といえる。

(2)はラルース書店から、すでに出されたクロニック双書的一篇として、最近に出た大冊で、アルシヴィストのファヴィエが中心となって編集したもので、各ページに多くの図版を入れ、年表も添加してあり、興味をもって革命史の全体をみられるようにつくられ、当時の政治ばかりでなく文化や経済の諸相も理解できるようになっているが、あまりに多方面にわたり過ぎて、中心がどこにあるかを掴み難い不満がこのころが、そのため一時期の終るたびに、全体のまとめの叙述を加えている。わが国では、この叙述方法をそっくり借用して日本史の書が出されているが、印刷の鮮明さその他で問題にならない。

(3)は著者ジャック・ゴデショ(トゥールーズ・ル・ミライユ大学名誉文学部長)で、革命専門誌(A・H・R・

F)の編集代表者でもある氏から、筆者に一九八八年三月同書の刊行直後、寄贈をうけたが、革命史の各重要事件に簡潔な説明を付し、付録として関係人物の小伝(全体の三分の一にも及ぶ)をつけてある革命史年表としては、立派に整備されたものである。先年同先生の『反革命』を訳出刊行したので、今回も許諾をお願いして邦訳を進めて完了したが、拙訳は版權取得がおくれたので、結局刊行できなくなり、五名の訳者によって別の邦訳が出された。「フランス革命年代記」日本評論社。原著者は、アメリカのプリンストン大学のパーマー教授と同じく「大西洋革命」の論者であり、アメリカの独立革命に始まるヨーロッパ諸国の革命は、フランスを中心としているが、ヨーロッパ各国にも起こっており、重要な変革をなしたことが述べ、フランス革命そのものについても、ヴァレンヌ逃亡事件やジロンド派の没落、テュイルリ王宮襲撃事件、ルイ十六世の裁判と処刑、九月虐殺、テルールや国内のリヨン、ヴァンデの反乱など、時間的に詳細をきわめた説明を展開し、その他イギリスの産業革命その他各国の革命についても、重要事件を洩らさず説明している。最後の小伝においては、フランスばかりでなく、関係ある各国の人物についても、簡潔な伝記を述べて興

味深いものがある。革命諸委員会の構成など、わかり易い説明図を加えているのも有益と思う。要するに(1)―(3)の年表としては、これがもっとも分り易くまとめられたものであり、革命史研究者にとって重要な参考書としての役割をはたすことを確信する。最後に Orientations bibliographiques として、「フランス革命を述べる著者たちが分裂しているのは、革命当時の人々にとって革命の受けとり方が、さまざまに分れていたのと同様である」という言葉をもって始まり、エドモンド・バークの『フランス革命にたいする省察』から、近代のテーヌやガクソットの革命反対の見地を述べつつ、十九世紀後半のトクヴィールのすぐれた見解が再評価をうける必要があること、ジャン・ジョレス、マティエ、ルフェーブ、ソブールの経済的、社会的見地の重視がオラルの政治史中心の見地を修正しなければならなかったことを述べ、さらにフランソア・フュレとドニ・リシエの革命史は、すでに成立し進行しつつある改革を、パリの革命指導者たちが「横滑り」(dérailage) の方向にみちびいてテルールを導いたことなどを述べ、最後に、フランス革命を、ヨーロッパならびにアメリカ諸国の一連の諸革命のなかに位置しなければならぬと考えるが故に、

フランス革命二百年祭記念を期して発刊された内外の諸著書について

自分も「修正派」の一人である、と結論している。またいままで学会にあまり知られていなかった George Soria, Grande Histoire de la Révolution française (Paris, Bordas, 3 vols.) が、すでに三巻完結した、立派な図版を入れた良書であると述べ、最後に史学第五七巻三号で筆者が紹介した(Michel Vovelle, La Révolution française, images et recits, 5 vols, Messidor, livre Club Die-rot, 1987)を革命史の絵画図版集としては、革命を生き生きとわれわれに再現してみせる最良の作として結んでいる。

(4)は、かつて出された史学入門双書のクリオとは別に新クリオ双書として、P・U・Fから出版された多数の双書中の一篇であるが、フランス革命を中心としながら、題名どおり、諸国の革命についても叙述し、詳細な図書解題に特色があり、何回も改訂版を出しているが、一九八六年の第四版がもっとも新しいものである。

(5)は、ゴデシヨ氏の主著の一つともいふべきもので、フランス革命が近隣ヨーロッパ諸国ならびにその他の国々にいかに波及したかを詳細に説明し、氏の大西洋革命説を体系的に整理した大著であり、筆者は原著者の勧めによって邦訳にとりかかっているが、なかなか大仕事であ

る。(ゴデシヨ先生は残念にも一九八九年八月二十四日に他界された。)

(6)はフランスに先立ってアメリカで出されたフランス史の辞典であるが、現在フランス革命史(二冊)、ナポレオン時代史、途中一冊未刊で第二帝政史および第三共和政史(一九四〇年まで二巻)まで六巻が出ており、アメリカの諸大学およびヨーロッパの諸学者の寄稿をも得て、諸事項について要領よく説明しているが、各項目ごとに筆者名および参考書目をあげている。ただし図版挿画の類は一切含んでいない。(7)はナポレオン時代史であるが寄稿者の一人に、ジャン・テュラール教授もある。このシリーズは、読み易く利用価値も多い。

(8)は、そのジャン・テュラール、ソルボンヌ教授が、二〇五名の学者を動員し編集したナポレオン一世についてのあらゆる関係事項を詳細にわたって解説した、ナポレオン百科事典であり、若干のカラー図版と他の図版をも含むが、二千頁にわたる驚くべき大冊である。「大陸封鎖」のような項目には、数ページにわたる説明があり、その関係事項は、ほとんど洩れなく述べられている。今後ナポレオン研究に志す学徒には欠かせない書といえよう。(9)は比較的小著であるが、著者はグルノーブル大学教授

であり、革命史の専門家ではないと思われるが、本稿の始めに述べた遅塚教授の「思想」における所説のとおり、革命史の諸問題に疑問を投げかけている。この点で(11)のD・M・C・サザランの「革命と反革命」の見解と多くの一致点があり、革命についての、啓蒙思想の影響を重くみないこと、ブルジョアジーの抬頭と主導権への疑問、反革命の弾圧が却って革命にたいする国民の不滿の増大を招いて、結局はナポレオンの独裁をみちびいたことなど、すくなく新しい疑問の提起がみられる。

(10)は革命の諸問題の解説として、手堅い説明をもって要領よくまとめられており、新しい見解も述べられ、特別な問題提起はないが、革命史全体の基本的理解には、どうしても必要なことは洩らさず、小冊子としては十分に役立つものである。いままで *Bernardine Melchior-Bonnet* 女史によるラールス出版の革命史および帝政時代史の小事典(一九六五年)があったが挿画を含み事件ならびに伝記に重点がおかれ、充分に興味をもって読めるが革命史の問題点の理解には不十分であったと思う。

(12)は先述のように、革命の「心性」(もしくは集团的心性)を重視するM・ヴォヴェル、ソルボンヌ教授の著書

で、ヴォヴェル教授の個人ならびに集団における「心性」が、革命を大きく支配したことを力説しており、教授には他にもこの種の著述がある。これは革命史の未開拓であつた分野に新しい見地を導入したものととして注目されるが、(13)は教授が中心となつて、フランスの諸学者の執筆により、革命期フランスの政治ばかりでなく、経済、社会生活の各方面の実態を述べ、フランスの革命以後の時代にもわたる展望を述べており、反革命その他については、ジャック・ゴデシヨ氏の記述を含み、要するに革命期の多方面にわたるフランスの状態を述べたものとして興味深い。

(14)は(1)の執筆者の一人であるファイヤール氏が、革命の正義のための犠牲者として、一七九二年ルイ十六世の処刑から一七九四年のロベスピエール没落にいたるまでのテールの実態を年代的に調査し、説明したものである。

検事総長フリーキエ・タンヴィルによつて死刑の宣告をうけたものだけでも五、三四三名になるとのことである。テールの実情を調査した書として、ここにあげた。

(15)はカリフォルニア大学教授リン・ハント女史の研究で、政治史にかんしてアミアン、ナンシー・トゥールーズ、ボルドーなど、それぞれ原地において史料を研究分

析したのち、政治と文化の結びつきにつき新しい見解を打出そうとする試みであり、注目に価する。邦訳「フランス革命の政治文化」松浦義弘、平凡社、一九八九年。(16)は革命史に今までみられなかった地図を、精細な調査によつて明らかにしたもので、普通の地図と当時の教育の調査によるものとの二篇に分れているが、立派な研究成果を示し、革命史の諸研究にとつて、ひじょうに有益な労作と信ずる。

(17)は革命期に亡命貴族としてフランスを出てから、各国の同志と連絡をとつて国際的に大活躍をした有名なスパイの中心となつた人物アントレーグ伯の評伝である。彼は一時捕えられたとき、獄中でポナパルトと会見し、供述書の作製を強制されたりしているが、最後は一八一三年七月、ロンドン近郊で、歌手でもあつた妻とともに謎の暗殺にたおれた。

(18)は比較的小冊子であるが、共和政を救うために、ポナパルトのクーデタによる独裁制への移行がやむを得なかつたことを詳細に説明している。

B 日本出版書

(1)『ロベスピエールとドリヴィエ』遅塚忠躬著 東大出版会(一九八六年)

- (2) 『パリのフランス革命』柴田三千雄著 東大出版会 (一九八八年)、「フランス革命」岩波書店一九八九年
- (3) 『フランス革命と民衆』アルベール・ソブール著 井上幸治監訳、新評論(一九八四年)
- (4) 『革命祭典』モナ・オズーフ著、立川孝一訳(岩波書店、一九八八年)
- (5) 『フランス革命に抗して(中公新書)』伊東冬美著 中央公論社(一九八五年)
- (6) 『猫の大虐殺』ロバート・ダーントン著、海保真夫、鷺見洋一訳(岩波書店、一九八七年)
- (7) 『フランス紀行』アーサー・ヤング著 宮崎洋訳、法大出版局(一九八五年)
- (8) 『大革命前夜のフランス、経済と社会』アルベール・ソブール著、山崎耕一訳
- (11) 『フランス革命論』フィヒテ著、枅田啓三郎訳 法大出版局(一九八八年)
- (12) 『シェエースの憲法思想』浦田一郎著 勁草書房(一九八七年)
- (13) 『フランス革命史入門』小林良彰著 三一書房(一九七八年)
- (14) 『フランス革命と祭り』立川孝一著 筑摩書房(一九

八八年)

- (15) 『パリの夜―革命下の民衆』レティフ・ド・ラ・ブルトンヌ著 植田祐次編訳 岩波文庫(一九八八年)
- (1) は、一七九二年三月にパリの南四五キロのエタンブで発生した農民一揆とその後、五月一日に立法議会に提出した司祭ドリヴィエによる請願書について、全文の翻訳を中心として、この農村革命を詳細に検討し、農民運動を支持するロベスピエールがいかに対処したかを述べている。ロベスピエールの農村革命ないしは民衆革命の支持について、あらゆる史料の検討により、フランス革命の独自性は民衆と農民革命に媒介されたブルジョア革命であったと結論した力作であり、最後にフランス革命の世界史的位置にまで論及されている。
- (2) はパリの革命の主導権をもったサン・キュロットの分析を基礎として、パリの革命がいかにして起こり、また進行していったかを詳細に述べたもので、革命史の文献に重要な一書を加えられたものであるが、一七九二年八月十日までにとどまり、いずれそれ以後のものも出されるのを期待する。
- (3) は一九八二年にまだ働き盛りに他界されたアルベール・ソブール教授の有名な『共和暦二年のパリのサンキュ

ロット』の重要な部分を抄訳したものであるが、一九六二年に出された一千頁以上にわたる膨大なテーゼにとりつくのは容易でないので、このような形で読み易くして出されたことは、ひじょうに有益であるといえよう。

(4)は、フォークロアに重点をおいて革命を研究しようとしている立川孝一氏（前述）が、プロヴァンス地方での自身の研究を中心として、人々の「心性」に深く根ざしている革命祭典の実態を明らかにしようとした異色ある力作である。(4)のモナ・オズーフ著は、フランス国立科学研究所の研究員で、アナール派の人といわれる女史の主著の一部と他の二つの論文とを併せて邦訳されたもので、同様の主題を取扱っている。両書を併読されることが望ましい。立川著「フランス革命」中公新書もある。

(5)は学習院大学の講師であるが、フランスのナンシー大学で研究を積み、博士号を取得された女史の興味ある著書であるが、シャトーブリアンの全集を読破されたという基礎の上に、シャトーブリアンの反革命的思想を詳細に説明されている。ただし序説のなかで、フランスおよび日本を含めてフランス革命はすべて社会主義的傾向一色であると断定されていることは訂正を要する。

フランス革命二百年祭記念を期して発刊された内外の諸著書について

(6)は興味ある表題だが、塾の二教授によって訳された十八世紀フランスの庶民の思想傾向についてのアメリカのハーバード大学教授ダントンの著書で、「心性史」研究の書として深い洞察を含み、ひじょうに面白く読める。

(7)は本塾宮崎教授による定評ある名著の邦訳で、フランス革命史研究に欠くことはできない。

(8)は、Albert Soboul: *La France à la veille de la Révolution, Economie et société* (1977) の全訳であり、革命史の入門書として定評あるもので、原著者序文ならびに原著には簡単であるが、さらに詳細な書籍解題を付せられ、訳文も正確で読み易い立派な書である。一九七四年の増補改訂版によったものであるが、巻末に本書初版発行のあとからのフランスにおける諸家の反論も載せてある。

(1)は、フランス革命勃発の当初、ドイツの哲学者たち、カント、ヘーゲル、フィヒテなどは、ルソーの意見に賛成していたこともあり、革命に同情的であった。そのときのフィヒテは、哲学者らしい精緻な議論をもって、革命を擁護する立場を表明している。のちにナポレオンのドイツ侵入になってから『ドイツ国民に告ぐ』という連

続講演によって、ナポレオンに反抗したことは周知のことである。

(12)は、『第三身分とは何か?』で革命の原動力となり、そのご何回かフランス憲法制定に貢献したシエイエスの憲法思想について、フランスのバスティード (BASTID) の大著も出ているが、わが国で、これらを参考しつつシエイエスは憲法についてどのような思想をいただき、またどのように実際に活動したかについて研究した立派な労作である。

(13)は発行年代がすこし以前であるが、フランス革命について単なる事件の概説にとどまらないで、土地問題、経済問題を中心にすえて論じた諸大家の説にも批判を加えた立派なものであり、巻末に当書発行年代までの革命史についての邦語論文の詳細な目録がある。なお、憲法問題については、辻村みよ子成城大助教授の「フランス革命の憲法原理」(一九八九年日本評論社)が憲法学者としての意見をまとめられている。

(14)は、革命期のパリ民衆の行動や「心性」についてやや小説風であるが、事実をかなり正確に述べた、大部の著作の抄訳であって、これだけにまとめた訳者の力量は賞賛に価する。

以上、筆者のみた限りで、表題の書の紹介に努めた。

付 記

本稿を書きあげた後に出された重要な諸書について、若干の追加をやむなくされたので、つぎに述べるのを許されたい。

1) François Furet & Mona Ozouf: Dictionnaire critique de la Révolution française, 1988, Paris, Flammarion

2) Albert Soboul: Dictionnaire historique de la Révolution française, 1989, Paris P.U.F.

3) Roger Caratini: Dictionnaire des personnages de la Révolution, 1988, Paris, Le Prés aux Clercs

(1) は普通の事典ではなく、諸事件、革命に関係した種々の傾向の人物について、諸制度や創造物、思想、革命の解釈と歴史家についての五章に分れて、両編集者と諸学者の協力によって、革命史の問題点はどこにあるかを追求しようとしたもので、新しい見方を思い切って導入し、従来の諸革命観を批判したものであり、新たな論争点を提出しようとした野心的な労作である。F・フュレは一九七五年に「フランス革命を考える」(Penser la

Révolution française) (邦訳、大津真作、岩波書店一九八九年)を出してから、フランス革命の旧来の考え方に挑戦するような諸書をつぎつぎと出し、本書もその一部とみることができる。

(2) はA・ソブール教授が構想されていた素案にもとづいて、J-R. Suratteau氏が中心となって諸学者を動員して完成したもので、普通の事典としての形式で、革命に関する事件、人名、関連する諸問題などをすべてとりあげて、詳細に説明し、細字で千百頁にわたり、典拠となる立派なものである。

(3) は、革命史に現われる人物小伝であるが、簡潔な要をつくしたものとして、利用価値が高いと思われる。その他、ゴデシヨ氏のお手紙によれば革命二百年記念を期してフランスでは四百種も著書が発行されたのとこととで、以上はそのごく少数にすぎない。また一九八九年のソルボンヌにおける革命史の正式のシンポジウムの成果は、まとめて刊行の予定であり、十分に期待して待つことにしたい。

(4) 《Sieyès, la clé de la Révolution française,》
Jean-Denis Bredin, Paris, Editions de Fallois, 1988)
シエイエスについては、種々の書が出ているが、本書

は Paul Bastid ((Sieyès et sa pensée, 1978), Paris Hachete)の流れを汲んで、シエイエスの革命にたいする貢献あるいは、その意義について、新しい見解を展開した大著として紹介しておきたい。

本稿の校正を終った直後、重要な一書を入手したので、ご紹介したい。パリで一九八九年に出された「博物館双書」の一篇として『パリのフランス革命』と題し、テュラール教授の説明を加えて、パリのカルナヴァレ博物館所蔵の、フランス革命関係の絵画、その他の記念物をまとめて、色彩のあるもの、その他、立派な印刷でよく理解されるように説明してあり、まことによい同博物館を知る案内書となっている。